

「昭和」を復元 魔法の手

飾り物ではなく、家電を修理して「現役」に



畳1枚ほどの作業場で、古いテレビと向き合う。「お客さんから『きれいに映るようになった』と言われると本当にうれしい」＝福岡市南区清水2丁目

ひょう

骨董&リサイクル店経営

大場 敬志さん(51)

ガチャガチャ、とチャンネルを回す真空管式の白黒テレビに、木製のラジオ。壁には古い柱時計や戦後間もない頃の大衆映画のポスターが張られ、郷愁を誘う。裸電球の光がレトロな雰囲気の色を添える。

骨董&リサイクルショップ「katsu」。路地裏にあるその店には懐かしい「昭和」があった。

狭い店内には、蓄音機やローラー式の脱水装置が付いた洗濯機、ダイヤル式の黒電話機など、かつての生活雑貨がすき間なく飾られている。どれもこれも修理を終えて、「現役」に復帰した品々だ。

若い男女の姿もあるが、幼少を過ごした茶の間への懐かしさからか、欲しがるのは40〜50代の男性が断然多い。半日ほど店内をぶらぶらする客も少なくなく、中高年の隠れた遊び場となっている。

オープンした当初は、現在の家電などを扱う普通のリサイクル店だった。白黒テレビや古いラジオは店内の片隅にあっただけ。だが、客の目は、古ぼけたテレビから映し出される画像と、しつかり音声を流すうちに注がれた。「オフジエだと思っただけ、本当に映るんでびっくりしたみたい。半信半疑で店に出したけど、やって行けそうな気がした」

中高年の「思い出」も再生

修理の腕の良さが、口コミで広がり、注文や修理依頼が増え始めた。半年後、昭和30年代前後の家電に絞り、修理して販売するようになった。今では県内のほか、東京や千葉、高

電子機器メーカーの元福岡営業所長。岩手県釜石市の工業高校を卒業後、東京の本社に入社。放送局の音声設備のシステム設計に携わった。01年5月に福岡営業所に転勤したが、不況の影響は自分の会社にも及び寄っていた。希望退職を募る通達が出され、辞めていく同僚がいた。所長として部下の面談をするうちに、「リストラに手を貸すよ、自分が会社を去ろう」と思い始めた。

その頃、ふと立ち寄ったリサイクル店で、古い真空管式のラジオが目にとまった。機械いじりが好きで、小学3年の時にゲルマニウムラジオを作った頃の記憶がよみがえった。修理したら、音が出た。「ただの飾り物ではなく、修理して実際に使えるものを売る骨董屋をつくりたい」。会社を辞めて1年後の昨年3月に開業した。

「もしラジオが直ったら、あの人はどんな顔をするだろうか、そんな想像をしながら修理するのも楽しみの一つなんです」

魔法の手は、機械を修理するだけでなく、思い出も一緒によみがえらせるのかもしれない。

店福岡市南区清水2丁目(木曜日定休)。電話は092・5442・908

2。

(二 高橋彦)

福岡 博 ストーン

しやいのいん気願受人